

登場人物

Characters



う いらゆうこ
宇井琉子

理央と同じ学科の女子学生。
真面目で、理央とは気が合う。
アルバイトは主にコスプレ系。



はくとりお
白兔理央

神農医科大学1年生。
感染症に興味を持つ。
病原体が美少女の姿に見える。

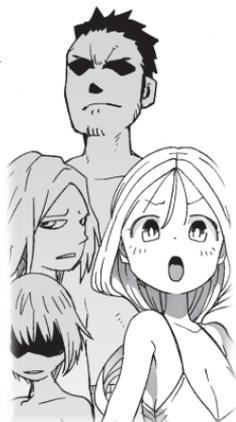
エシュリー

ヤキモチ焼きの
ツンデレ大腸菌。
理央の部屋で
同居する。
グラム陰性。



スタフィ

おしゃれでかわいい
黄色ブドウ球菌。
意外に積極的。
グラム陽性。



ゆかな with 取り巻きーズ

琉子の友人と、その取り巻きたち。

第一章 ぼくのかわいい病原体

1 顕微鏡の下の美少女

最近、妙なものが見えるようになった。手のひらに乗るぐらいの大きさの、妖精みたいなかわいいう女の子たちだ。

ぼくの名前は白兔理央、神農医科大学の1年生だ。今は一般教養課程で、専門的な医学の授業はまだはじまってない。でもゆくゆくは、感染症関係の専門に進みたいと考えている。

作家マイケル・クライトンの最高傑作といわれる小説「アンドロメダ病原体」……ぼくは子供のころ、深夜映画でその存在を知った。町が謎の病原体で全滅し、科学者たちはその病原体の正体をつきとめるため分析を始める……という物語だ。

さまざまな病気の原因となる病原体をつきとめる……そんな、名探偵のようなスリルにぼくはすっかり魅せられてしまった。そういうわけで、その日もぼくは古い小さな2階建てのアパートの1階にある自分の部屋で、机にむかって一人で顕微鏡をのぞいていたんだ。「さーて、今日はどんな病原体をゲットできるかな？」

ぼくは大学で集めてきた、いろんなものを机の上に広げる。

道に落ちていた犬の糞、鳥の羽、死んだ虫、池の泥、その他いろいろ。これを希釈して、プレートに入れた寒天培地に塗りつけて培養する。すると、白や黄色やオレンジなど……いろんな色のコロニーが出てくる。これをプレバートに乗せて顕微鏡でのぞくと、細菌や酵母や糸状菌（カビ）といった、いろんな病原体があらわれる。

それをデジカメで撮影して、ノートパソコンでデータベース化するのがぼくの趣味だ。小学生のころポケモン集めに夢中になったノリで、ぼくは毎日、病原体を探している。

なれないうちは、どの病原体も同じに見えた。

たとえば大腸菌と酵母菌は、どちらのコロニーも、白くてつるりとしてよく似てる。顕微鏡で見た感じも、どっちも細長いカプセルみたいな形をしていて、そっくりだ。

だけど見なれてくると、まず大きさが違う。大腸菌のほうが小さくて細い。グラム染色をしてもちがう。大腸菌はグラム陰性細菌なので赤くなり、酵母菌は細菌ではないけど細胞壁があるためグラム陽性の紫色に染まる。

何よりも酵母菌のほうが、まるまるっこいふんいきでかわいい。長期培養で弱った酵母菌や死んだ酵母菌はグラム陰性に赤く染まることがあるけれど、大腸菌とはかわいさが違うから、顕微鏡で見なれてくれば酵母菌だつてことがわかる。これが、病原体の「顔」がわか

る」ってことなんだろうか。

とにかく酵母菌は、大腸菌みたいな細っこい上に真つ二つに細胞分裂するあたり何となくギスギスしたふんいきの奴に比べると、ほんとにかわいいんだ。

『ちよつと、バカ宿主^{ホスト}、あんなのどこがかわいいわけ？ デブだし、酔っ払いだし、そばにも寄りたくないわよ。あんた、目が腐ってんじゃないの？』
んっ？

女の子の声が机の上から聞こえてきた。机の上には、菌を寒天培地に塗るときに使うバーナー、白金耳、ガラスのスパチュラ、そして積み上げた寒天培地のプレート……そのプレートの上に。

女の子が……立ってる！

身長は15センチぐらい。きゃしゃすぎる体が頼りないけど、とびきりの美少女。色白で、白い髪はソーセイジのような縦ロール。白い服に、真つ赤な目。そしてトゲトゲのついた服……。

ぼくはまず、目をうたがった。それから、頭をうたがった。

そりゃあ一人暮らしをはじめてから、一日中ほとんど誰ともしゃべってない。大学に行っても講義を聴いてるか、そうでなければ図書館に行つて病原体関係の本を読みふけて

る。

「ああ、やっぱり少しは人としやべるべきだったんだ。女の子の幻覚を見るなんて、末期的症状だ！」

ぼくは思わず両手で目をおおった。その指を、彼女は小さな両手でぐいっとつかんで引っぱった。

『目をおつかっほじってちゃんと見なさいよっ、このバカ宿主^{ホスト}！ あのデブスとあたしと、どっちがほんとかわいいのかを！』

いや、目をおつかっほじったら何も見えなくなるし。

「……って、あれ？」

指を引っぱられて目から手をはなしたとき、ぼくの目のまえにはもう何もなかった。ただ、大腸菌のプレートが転がっているだけで……。

「……今日はもう寝よう。そして明日は、誰かときちんとしやべろう」

ぼくはどっと疲れて、布団もしらずに眠りについた。